

中国における電子オルガン専門教育の歴史と現状

張 亜達 ZHANG Yada

電子オルガンが中国で演奏されるようになって、すでに 30 年以上になる。この新しい楽器が短い年月のうちに中国で受け入れられ、急速な発展を遂げたことは注目に値する。本論は、中国における電子オルガンの専門教育を中心に、その黎明期から現在までの発展過程を 3 つの段階に要約し、さらに、瀋陽音楽学院、中央音楽学院、中国音楽学院のカリキュラムを事例に、中国の電子オルガンの教育の現状を紹介し、今後のさらなる発展のための課題を提案した。

1. 専門教育の黎明期

中国における電子オルガンの専門教育の発展は、日本とのさまざまな関係を指摘することができる。1985 年、ヤマハ音楽振興会と中央音楽学院、上海音楽学院がそれぞれ共同で設立した「ヤマハエレクトーン指導者養成コース」は、電子オルガンの中国での普及発展の嚆矢となった。1988 年には天津音楽学院で開設されている。この組織で育成された人材は、今日の中国における電子オルガンの発展の中核となり堅実な基礎を築き上げた。しかし、「ヤマハエレクトーン指導者養成コース」だけが中国の電子オルガン専門教育の発展の要因ではなく、中国人留学生沈曉明が日本の音楽短期大学で電子オルガンの専門教育を受け、帰国後電子オルガンの専門教育で果たした役割も重要である。

中国最初の電子オルガンの留学生は、1988 年に作陽音楽大学に研究生として在籍した沈曉明で、彼は 1990 年に修了して帰国後、瀋陽音楽学院で中国最初の四年制の電子オルガンの専門課程を開設し多くの優秀な後継者を育てた。

下記の表は、「ヤマハエレクトーン指導者養成コース」出身者と沈曉明から指導を受けた瀋陽音楽学院出身者達が、中国のさまざまな音楽学院で電子オルガン専門課程を開設した年表である。

【表 1】中国の音楽学院における電子オルガン専門課程開設年表

	「ヤマハエレクトーン指導者養成コース」出身者による開設	瀋陽音楽学院出身者による開設	その他の事項
1985 年			「ヤマハエレクトーン指導者養成コース」設立
1988 年			沈曉明が作陽音楽大学に研究生として留学
1990 年		瀋陽音楽学院	沈曉明が帰国
1994 年	天津音楽学院		
1996 年		上海音楽学院	
2000 年		星海音乐学院	
2001 年	西安音楽学院	中央音楽学院 武漢音楽学院	
2002 年		四川音楽学院	
2005 年		中国音楽学院	

「ヤマハエレクトーン指導者養成コース」で学んだ卒業生たちは、1994 年天津音楽学院、2001 年西安音楽学院で電子オルガンの専門課程を創立した。1990 年に瀋陽音楽学院で電子オルガンの専門課程を開設した沈曉明の教育成果が現れ始めたのもその頃で、1995 年に瀋陽音楽学院を卒業し教員となった朱磊は、1996 年 YEC(ヤマハエレクトーン・コンクール)の第 2 位を獲得し、同年上海音楽学院に電子オルガンの専門課程を開設している。瀋陽音楽学院で教育を受けた学生は、中国全土のさまざまな四年制音楽学院で電子オルガンの専門課程を開設した。2005 年には、中国の音楽学院 9 校に電子オルガンの専門課程が開設されている。この頃には、すでに中国の電子オルガンの専門教育は本格的な発展段階に入っていたといえるだろう。2016 年、浙江音楽学院が創設され、電子オルガン専門課程が上海音楽学院出身者によって開設されて

いる。

中国における電子オルガンの専門教育は目覚ましい発展を遂げた。2016 年には全国電子オルガン教育連盟が創立され、連盟に参加する大学はすでに 110 校となっている。今後さらにこの発展は引き継がれるものと思われる。

2. 専門教育の 3 つの発展段階

中国における電子オルガン専門教育の発展は、以下の 3 つの段階に分けることができる。

【第一段階】「ヤマハエレクトーン指導者養成コース」の教育システムが導入された時期(1985～1990 年)

1985 年に「ヤマハエレクトーン指導者養成コース」が中国で設立されるが、そこでは当然ヤマハの教育システムが導入された。その修了基準は、ヤマハの演奏グレード 5 級以上であった。

【第二段階】ヤマハの電子オルガン教育システムと中国で開発された電子オルガン教育システムとが融合された時期(1990～2003 年)

1990 年、最初に瀋陽音楽学院から始まった中国電子オルガン専門教育は、日本のヤマハの電子オルガン教育システムと中国の実情に合った電子オルガン教育法とを融合させることで発展してきた。その背景は、当時、中国ではピアノやアコーディオンの演奏経験者が電子オルガンを始めることが多かったが、電子オルガンの台数が少なく、最初に楽器に触れる年齢が比較的高く十代後半であったことがあげられる。また、鍵盤楽器の演奏経験はあっても、足鍵盤や電子オルガン独特の鍵盤コントロールの経験がまったく無い者が多かった。そこで、初めて中国の電子オルガンを経験する学生に対して、中国独自の訓練方法を導入する必要性があったのである。それらは「補助訓練法」¹と名付けられ、通常のトレーニングと組み合わせることで相乗的な効果をあげた。「補助訓練法」のベースとなる理論は、西洋音楽がパイプオルガンで培ってきた伝統的な練習方法と中国の伝統的な哲学や美学の観念を理論的な基礎としている。つまり、これまでの電子オルガ

ン演奏技術と中国の伝統的なフィジカル・エクササイズ、メンタル・エクササイズを取り入れている。このような工夫によって、中国の電子オルガンの演奏レベルは飛躍的に向上した。

【第三段階】電子オルガン教育システムの普及と問題点の確認・修正の時期(2003 年～現在)

現在、中国の電子オルガンを専攻する教員と学生の演奏技術はかなり成熟しているが、和声、即興演奏、創作・編曲能力などの基礎理論のスキルが低く、電子楽器の特性であるエフェクターなどのさまざまな機能を応用する能力やコンサートなどで必要な PA などに関する音響の基礎知識が足りないことが指摘されている。

電子オルガンの専門教育を担当する多くの教員は、これらの問題点を共有し、解決方法を模索している。近年、各音楽院・大学では、音楽の基礎理論と電子楽器の機能面の応用の必要性に注目し、即興演奏、創作・編曲、電子楽器の機能を応用する能力を習得させるカリキュラムを開設した。

2016 年 11 月「全国電子オルガン教育連盟」が創設され、その時催された全国音楽大学コンサートでの音楽学院(中国では、11 校の Conservatory of Music がある)と一般大学の音楽学部電子オルガン専攻のコンサートプログラムを比較すると現在の状況が理解できる。音楽学院の学生が演奏するプログラムのすべての曲がこのコンサートの演奏者のために作曲されたオリジナル、あるいは編曲された作品であり、創作・編曲に関する問題点はかなり解決されていることを証明している。しかし、一般大学の音楽学部電子オルガン専攻の学生によるコンサートでは、その割合はわずか 5%を占めるに過ぎない。このことから、一般大学の電子オルガン専攻の学生が演奏するプログラムは、出版された楽譜を使うだけで創作や編曲による独自の表現にまで至っていないことがわかる。

音楽学院における創作・編曲の教育レベルの発展と進歩が演奏曲目に反映されている例として、2016 年 11 月「全国電子オルガン教育連盟」創設大会(上海)の 2 つのプログラムを転載した。

¹ 「補助訓練法」は、「電子オルガン補助訓練法とその教育的応用(張亜達 瀋陽音楽学院修士論文 2005 年)」に詳しい。

2016 年 11 月 18 日 19 : 30 コンサート（音楽学院のプログラム）

1. サントリーニ島（電子オルガン・アンサンブル）作曲 yanni 編曲：程露 蔡銘威 四川音楽学院
2. 3 曲のゲーム音楽「魔獣、怒りの小鳥、コントラ」（電子オルガン・アンサンブル）作曲：Ramin Djawadi Ari Pulkinen Konami 編曲：王秉坤 楊崢 天津音楽学院
3. チベット随想（電子オルガン・アンサンブル）作曲：李東亮 編曲：李東亮 韋智戰 西安音楽学院
4. Music for string instruments percussion and celesta.（電子オルガン独奏）作曲：巴托克 編曲：曾靖茜 中国音楽学院
5. 防衛黄河（電子オルガン独奏）作曲：□ 星海 編曲：□ 渤 瀋陽音楽学院
6. アンサンブル——That ' s is（電子オルガン・アンサンブル）

2016 年 11 月 17 日 19 : 00 祝典コンサート（音楽学院のプログラム）

1. アイアンマン交響組曲（電子オルガン・アンサンブル）作曲：ブライアン・テイラー 編曲：趙偉強 浙江音楽学院
2. シルクロードの夢（電子オルガン・アンサンブル）作曲：彭曉波 編曲：彭曉波 星海音楽学院
3. アンサンブル——祝典序曲（電子オルガン・アンサンブル）作曲：趙曦 編曲：丁□ 平 孟丹丹 耿文心 武漢音楽学院

近年の特色として、アメリカや日本などへの留学でパイプオルガンのレッスンを受けた若い電子オルガン奏者は、両方の楽器の演奏者として活躍し、教育機関でもこれら二つの楽器の演奏者を育てる試みをしている。これは、世界的にも特徴のある現象と言える。

3. 音楽学院における電子オルガン専攻の現状

中国の電子オルガン専門教育では、各音楽学院の教育理念や専門の担当教員の人材養成の目的が異なるので、カリキュラムにそれぞれの特徴が出ている。それぞれの音楽学院のカリキュラムに関する比較研究は非常に意義のある課題だが、本論では 3 つの音楽学院を選んで調査を行った。

3-1 調査対象の大学とカリキュラムの分析

瀋陽音楽学院、中央音楽学院、中国音楽学院を選んだ理由は以下のとおりである。

1. 瀋陽音楽学院は、中国で最初の電子オルガンの専門課程が創設され、全国の音楽学院の電子オルガン教員

の 80%はこの大学で養成された。

（【表 1】中国の音楽学院における電子オルガン専門課程開設年表参照）

電子オルガンの専門教育では最も歴史の長い大学であり、普及、発展でも多くの功績があったこと、また、筆者の出身学院であることから調査の対象とした。

2. 中央音楽学院は全国音楽学院のトップであり、中国における最高の教育水準を有する。そのカリキュラムは、国際性と影響力を持つことから調査の対象とした。

3. 中国音楽学院は筆者が電子オルガン専攻の担当教員であり、カリキュラムの設置に関わって内容を熟知しているので対象とした。

3 つの音楽学院の必修科目の内容を比較するために、表を作り分析した。

【表 2. 3 つの音楽学院の電子オルガン専攻の必修科目（2017 年）】

		一年次	二年次
瀋陽音楽学院	専門 実技	電子オルガン	電子オルガン
		ピアノ（副）	即興演奏
中央音楽学院	専門 実技	電子オルガン パイプオルガン	電子オルガン パイプオルガン
		音色制作と 電子オルガン機能	即興演奏
中国音楽学院	専門 実技	電子オルガン パイプオルガン アンサンブル	電子オルガン パイプオルガン アンサンブル
		即興演奏	創作・編曲
			音響デザイン（エフェクター、PA）

		三年次	四年次
瀋陽音楽学院	専門 実技	電子オルガン	電子オルガン
		即興演奏	
中央音楽学院	専門 実技	電子オルガン パイプオルガン	電子オルガン パイプオルガン
		即興演奏	教育法

中国音楽学院	専門 実 技	電子オルガン パイプオルガン アンサンブル	電子オルガン パイプオルガン アンサンブル
		創作・編曲	創作・編曲
		音響デザイン(エ フェクター、PA)	音響デザイン(エ フェクター、PA)

中国では専門実技に割り当てられている時間は、各学院とも一週間に 90 分である。上記の表から分かるように、専門実技として 3 つの学院とも「電子オルガン演奏」があり、中央音楽学院は「パイプオルガン演奏」、中国音楽学院は「パイプオルガン演奏」と「アンサンブル」も追加され、90 分の中でレッスンが行われている。瀋陽音楽学院では「パイプオルガン演奏」は専門実技の中には入っていないが、2006 年にパイプオルガンが設置されており、専門の教員も在籍している。中央音楽学院と瀋陽音楽学院は「アンサンブル」を設置していないが、カリキュラム上の配置が異なるだけでアンサンブルの実績がないという意味ではない。同様に、中央音楽学院でもアンサンブルが無いわけではなく、専門実技の中の科目としては扱われていないだけである。「即興演奏」は、中央音楽学院と瀋陽音楽学院ではカリキュラム上同じ配分で 2、3 年生の 2 年間で履修する。中国音楽学院では 1 年次に 1 年間だけの履修である。

3 つの学院のカリキュラムの特徴としては、瀋陽音楽学院には 1 年次に「ピアノ」、中央音楽学院では 4 年次に「電子オルガン教育法」、中国音楽学院では「創作・編曲」と「PA 設計」が 2,3,4 年次に必修として組み込まれている。

これらのことから、瀋陽音楽学院では「電子オルガン演奏」を中心科目として最大限に扱い、他の科目を補完的に考えていることが分かる。中央音楽学院は、「即興演奏」は補完的な扱いで、「電子オルガン」と「パイプオルガン」が専門科目の中心である。さらに教育者を育成することにも焦点を当てている。中国音楽学院では、電子オルガン奏者として、演奏だけでなく「創作・編曲」や「音響」に関することなど、総合的な知識が必要であるという理念がある。

3-2 中国音楽学院の電子オルガン専攻課程カリキュラムの特色

筆者が勤務している中国音楽学院は、「中国民族音楽の発展と伝承」を特色とする学院である。そのため、電子オルガン専攻のカリキュラムも学院の基本理念に添った内容が設定されている。

1) 中国音楽学院の教育理念

すでに述べたように、中国音楽学院の専門実技は在学中 4 年間のすべてで電子オルガンとパイプオルガンの演奏実技、そしてアンサンブルが課せられている。電子オルガンとパイプオルガンのレパートリーは、中国のスタイルによるオリジナル作品や中国伝統音楽の編曲が中心で、海外で出版されている楽譜による演奏の指導は、中国の作品を演奏するための技術習得のプロセスと位置づけられている。しかし、近年中国のオリジナル作品は多様化しており、西洋音楽などの海外の音楽語法が取り入れられている作品も多く聴かれるようになっているので、教育上必要なさまざまな音楽のスタイルに対応することを心がけている。

アンサンブルのレッスンでは、積極的に中国の伝統楽器を取り入れている。電子オルガンと中国伝統民族楽器によるアンサンブルには多くの可能性があり、オリジナル作品も近年では数多く創作されるようになった。楽器間の調律の問題や中国伝統楽器の独自の演奏スタイルに対応出来るだけの電子オルガンの表現力が必要なので、今後は電子オルガンに追加できるコントローラーの開発などの研究が待たれる。電子オルガンの機能を拡張して中国伝統楽器の表現力が模倣できれば、電子オルガンのみのアンサンブルや独奏でも、多様な表現の可能性がある。筆者の研究課題の一つである「電子オルガンの中国民族楽器音色の開発」というテーマは、2015 年の北京市科学技術研究資金に採択され、現在研究を継続中である。これは、現在の電子オルガンの音色を伝統楽器のサンプリングとコントローラーの開発によって拡張する試みである。

2) 総合的な能力を重視し「音響デザイン」をカリキュラムに追加

中国音楽学院電子オルガン専攻は、演奏だけでなく「創作」と「音響」の理解を深め、全体的能力を高めることを目標にしている。「創作」は、自分で作曲・編曲ができるだけでなく、他人のオリジナル作品の分

析ができること、作曲家の意図が理解できる能力を獲得するため設定されている。

電子オルガンのコンサートでは、演奏環境に合わせた音響設備とセッティングが良好な聴覚条件を保証する。「音響デザイン」は専門的な技術の修得が目標ではなく、基礎的な音響理論と音響システムを理解し、電子オルガンのエフェクターなどの機能を十分に使えるようになること、試聴環境の正しい評価ができること、PA・レコーディングエンジニアとの意思疎通ができる能力が必要と考えている。これまでエンジニアに任せることで注目されなかったが、電子オルガンの演奏者として重要なスキルである。

3-3 筆者による実践例

2015年11月1日、中国音楽学院国音堂で催された筆者自身の電子オルガンコンサートを実践例として報告したい。中国ヤマハ楽器音響投資有限公司が音響設備を提供し、筆者が現在在籍している東京藝術大学大学院音楽音響創造分野が音響のテクニカルサポートを行った。音響エンジニアは、日本の富正和氏（M-AQUA）である。中国音楽学院の研究助成で箏篋演奏家（呉琳）との共演、中国音楽学院の電子オルガンの専攻の教員と学生によるアンサンブル、電子オルガンソロ、パイプオルガンソロ、パイプオルガン協奏曲など、さまざまな電子オルガンの演奏形態の可能性と音響設計の新しい試みを行った。このコンサートの成果として、今後の中国音楽学院におけるハードウェア設備の設計方針や音響理論カリキュラムの内容を検証するのに十分な情報が得られた。

このテンプレートに上書きする形で書いて頂けると、字の大きさや書体、余白、行数等規定と同じになりますので助かりますので、そのようにお願いいたします。

おわりに

中国の経済成長と共に、電子オルガンの裾野は大きく広がっている。しかし、電子オルガンを永く定着させるためには、大きな質の転換が必要な第4段階（本論でこれまでの歴史を3つの段階で分けた次の時期）が重要である。専門教育機関の課題としては、この楽器が西洋音楽の中で発達してきた以上、ソルフェージュ、和声や対位法などのエクリチュール、オーケストレーション、ジャズやポップスの理論、即興演奏、ア

レンジ、アンサンブル、様式論（各国の伝統音楽の理論）が演奏のための基礎的な能力となっていなければならない。また、電子楽器である以上、楽器の機能を十全に使いこなすだけの音響の知識も必要である。これらが電子オルガンの専門教育のカリキュラムとして合理的に組み込まれていることが理想である。そして、作曲家から電子オルガンのオリジナル作品やアレンジ曲が継続的に提供されなければならない。愛好家や聴衆の安定した確保のためには、個性的なプロの演奏家の輩出と音響・映像・照明技術などを活用した多様なコンサートや国際的に権威あるコンクール（演奏だけでなく、可能なら電子オルガンのオリジナル作品の作曲コンクールなど）を継続的に行うことも必要である。このような課題は、日本の電子オルガンの専門教育においてすでに経験されたことなので、それを中国の実情に合わせて活用すべきである。

中国の電子オルガンの歴史が新しい段階に入った象徴は、2016年11月「全国電子オルガン教育連盟」創設大会（上海）が開催されたことである。今後は、定期的に企画されるこの連盟の会合で、多くの教員の意見が交換され、教育システムが改善されていくことになるだろう。優秀な教育者が育つことで、音楽学院と一般大学の電子オルガン専攻との格差も縮小される。そして、音響、映像、照明、マネジメントなどの専門家を招いて、音楽以外の分野との交流が図られれば、大きな成果が期待される。

張 亜達 電子オルガンコンサート

日時：2015年11月1日19：30～

場所：中国音楽学院の国音堂ホール

ホールの客席数：928席（1階：516席 2階：261席）

舞台奥行き：12メートル 舞台横幅：21メートル

使用楽器：Classic Organ Roland C-380（1台）

YAMAHA Electone STAGEA ELS-01C（4台）

箏篋（1台）

プログラム

第1部 独奏

1. carillon de westminster （パイプオルガン曲）

作曲：L. Vierne

Classic Organ Roland C-380

2. 第5番交響曲のtoccata （パイプオルガン曲）

作曲：C=M Widor

Classic Organ Roland C-380

3. The Electric Future （ポピュラー曲）

作曲/編曲：窪田 宏

- YAMAHA Electone STAGEA ELS-01C
4.music for string instruments percussion and celesta
作曲：B.Bartók 編曲：張 亜達
YAMAHA Electone STAGEA ELS-01C
5.黄河
作曲：冼星海 編曲：張 亜達
YAMAHA Electone STAGEA ELS-01C

- ゲスト演奏 Hardi Pandana
6.DANA HATI
作曲/編曲：Hardi Pandana
7.砂漠の朝日
作曲/編曲：Hardi Pandana

- 第2部 アンサンブル (YAMAHA Electone STAGEA ELS-01C
4 台) 編曲：張 亜達
8.swan lake
作曲：P.I.Tchaikovsky
9.第 9 番オルガンconcerto
作曲：G.F.Händel
10.箏篋concerto
作曲：劉長遠
11.carmen
作曲：G.Bizet
12.joyous beijing news reaches the frontier
作曲：鄭路 馬宏業

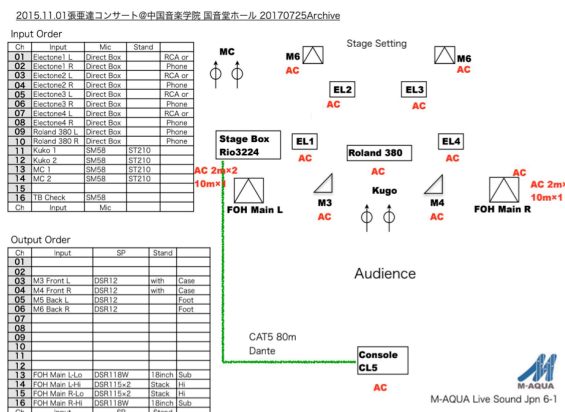
【写真1. 電子オルガンアンサンブル】



【写真2. 箏篋協奏曲】



【図1. ステージ音響プラン】



【図2. 音響機材リスト】

2015.11.01 東亜連コンサート会中国音楽学院 国家堂ホール.0927Plan

9/27 作成機材リスト

番号	機材名	数量	調達1	調達2	調達3	使用用途	貸し出し	返却	特記
01	YAMAHA DSR11S	4	YAMAHA			FOH L2 R2			AC Cableコネクタ形状
02	YAMAHA DSR11BW	2	YAMAHA			FOH L1 R1			AC Cableコネクタ形状
03	YAMAHA DSR112	6	YAMAHA			MON+Add Spair			AC Cableコネクタ形状
04	YAMAHA GL5	1	YAMAHA						AC Cableコネクタ形状
05	YAMAHA Rio1608-D	1	YAMAHA			Stage Box			AC Cableコネクタ形状
06	Ethernet cable 100m	1	YAMAHA						
07									
08									
09	DI Direct Injection Box	10ch分				EL2chv4 Roland 2ch			Phone to XLR
10	SM58 Dynamic Mic	4							Inst Kudo and Talk
11	Mic stand K&M ST-210	4							
12	XLR 3-11C-12C 20m Cable	4				Out FOH SP/In Mic			
13	XLR 3-11C-12C 10m Cable	20				Out MON SP/In Mic			
14	XLR 3-11C-12C 2-3m Cable	4				Out FOH SP L-H-H			
15	Phone(TS)-Phone(TS)2-3m Cable	10				EL2chv4 Roland 2ch			
16	AC Power Extension Cable(10m)	10				On Stage			電源延長線
17	AC Power Extension Cable(10m)	10				Stage Side			
18	AC Power Extension Cable(20m)	2				Audience Mix Console			
19									
20									
21	XLR 3-11C-12C Pair cable	5				番(1)番			予備と、配線図略のため。
22	ラッシングベルト	4				番(1)番			
23	DirectBox	6ch分				番(1)番			予備として
24	Phone(TS)-XLR 3-12C	10				番(1)番			予備として
25									
26									
Ch									

M-AQUA Live Sound Jpn 5-5

中国音楽学院（北京）電子オルガン講師
東京藝術大学大学院音楽研究科
音楽文化学専攻音楽音響創造分野博士課程
張 亜達 ZHANG Yada